

『くじらむら』

『くじらむら』

作・中屋敷法仁

今作『くじらむら』は、南郷村（現・青森県八戸市）に生きる人々と、わが国における捕鯨漁との関わりを題材としています。

私がい実際に南郷を歩き、いろいろな体験談を伺い、さまざまな資料と向き合う中で、刺激を受けたいくつかの事柄から創作しました。単なる歴史的事実の再現ではなく、捕鯨船に乗った方やそれを送り出した方々の、家族の絆や優しさ、思いやりを表現することを意識しました。出演者は公募により南郷や八戸、十和田や盛岡などの地域から集まりました。そこに東京からやってきた俳優たちが加わり、ひとつのチームとなり『くじらむら』という演劇作品に仕上げました。

物語と劇場空間の力を借りて、「虚構」の世界を生み出すのが演劇という芸術です。

南郷における捕鯨の歴史の温かさ、その「本当」の部分が伝わりましたら幸いです。

中屋敷法仁

南郷アートプロジェクト

なんごう小さな演劇祭『くじらむら』

パンフレットより

【登場人物】

マッコウ（マッコウクジラ）

マッコウの父母

マッコウの恋女房

マッコウクジラのメスたち

マッコウのこどもたち

ザトウクジラたち

ナガスクジラたち

シャチたち

ダイオウイカ

男（ナンゴウムラ）

人間

クジラ撃ち

船長

社員

解体の名人

冷凍船の男

医者

補足説明してくれる人

捕鯨船で働く人々

南郷村の人々（男の妻子・父母・親戚ら）

海の魔女

サブロウ（シャチ）

※10名程度の俳優が数役を兼ねての上演を想定。
※男（ナンゴウムラ）のセリフは本来は青森県南部訛りでの上演を想定。

【00】

開演。舞台上に現れる俳優。マッコウクジラ（父）である。
一礼。客席に語りかける。

父「さて、みなさんは、くじらを見たことがありますか？

くじら、と、ひとくちに言っても、いろいろな種類があります。

ナガスクジラ、ミンククジラ、ザトウクジラ、そしてマッコウクジラ。
マッコウクジラのオスは、20メートルあります。

だいたい、ここから、ここまでの大きさです。大きいでしょう。

マッコウクジラは頭から、超音波を出します。ぴびび…。

これが、超音波です。ぴびび…。

この超音波は、マッコウクジラにとって、とても大切です。

この超音波で、遠くにいる仲間とコミュニケーションをとります」

父、超音波を出す。

父「ぴびび…ぴびび…」

マッコウクジラのメスたちが現れる。

メスたち「ぴびび…」

父「メスが集まってきました。

やがて、子供が生まれます」

マッコウ「ぴびび…」

マッコウクジラの子ども（マッコウ）が現れる。

父「子供です。一頭のオスに、メスが数頭、子供が数頭。

これが、マッコウクジラの群れです」

メスたち「おなかすいたー。おなかすいたー」

父「ぴびび…。この超音波には、他にも使い道があります」

父、一頭だけになる。そこへダイオウイカがやってくる。

父「ダイオウイカです」

イカ「ぐにやり…」

父「ダイオウイカはマッコウクジラの大好物です」

イカ「ぐにやり…」

父「ダイオウイカを超音波でやっつけます。やっつけます」

父、「ぴびび…」と超音波で攻撃する。

父「ダイオウイカは、スミを吐いて、抵抗します」

イカ「ふーっ。ふーっ」

父「しかし、ここは海底1000メートル。真っ暗です。スミを吐いても、何の意味もありません」

父、ダイオウイカを捕まえる。

父「ダイオウイカみんな食べます。びびび…びびび…」

メスたち「びびび…」(集まってくる)

父「ほら食べる。みんなで食べる」

メスたち「いただきます」

マッコウ「…」

父「どうした。お前も食べる」

マッコウ「イカが、かわいそう」

父「かわいそう？」

マッコウ「イカが、痛そう」

父「イカは、ぜんぜん痛くはありません。」

メスたち「ごちそうさまでした」

父「オスが食べ物をとってきて、身体の小さなメスや子供を育てます。」

メスたち「さようなら」

メスたち「さようなら」

メスたち「さようなら」

父、息絶える。

マッコウ「父さんが死んじゃったよ。ごはんはどうするの？」

母「あなたが、自分で捕まえない」

マッコウ「怖いよ。怖いよ」

母「怖くないよ。あなたはもう立派な大人なんだから」

マッコウ「え？」

マッコウ、一頭だけになる。

【01】

マッコウ 「体長20メートル。体重50トン。
オスの、オトナの、マッコウクジラ」

マッコウ 「びびび…」

メスが集まってくる。

メスたち 「びびび…」

マッコウ 「メス…」

メスたち 「オス…」

マッコウ 「メス…」

メスたち 「オス…」

マッコウ 「こども…」

こどもが生まれる。

超音波でコミュニケーションをとる。「びびび…びびび…」
やがて一頭のメス（♀恋女房）、超音波が使えなくなる。

マッコウ 「どうしたんだい、僕のメス」

恋女房 「どうしたのかしら、この私」

メス1 「マッコウクジラの命ともいえる」

メス2 「び、び、び、が使えない」

マッコウ 「び、び、び、だよ。できるだろう」

恋女房 「び、び、び、だわ。できたのに…」

メス1 「おいていきましよう。こんなメス」

マッコウ 「は？」

メス2 「残念だけど、病気です」

マッコウ 「は？」

恋女房 「メスが集まり、子供を守り、群れで旅するくじらの子育て」

メス1 「仲間とのやりとり、イカの狩り」

メス2 「なにより重要、び、び、び」

メス1 「び、び、び、が使えないんじや」

メス2 「話にならない。役立たず」

メス1 「こいつに喰わせるイカはない」

メス2 「太らせたって意味がない。び、び、び」

去っていくメスたち。

マッコウ 「びびび。待ってくれ。びびび、が使えなくても、
こいつは僕のメスなんだ」

メス1 「メスは何頭もいるんです」

メス2 「出来損ないに用は無い」

恋女房 「おいていってよ。こんなメス」

マッコウ 「は？」

恋女房 「残念だけど、病気です」

マッコウ 「昔むかし、僕がまだ、母さんのおっぱいを飲んでいた頃だ。父さんが大きなダイオウイカを、口にくわえて帰ってきた。そいつはまだ、生きていた。苦しそうにもがいてた。母さん、兄さん、姉さんは、そいつを競うように食べた。頭から足からかじりつき、身体はバラバラにちぎれていった。お前も食べる、と父さんは言った。僕はとても嫌だった。イカが痛そうだったから。でも、父さんは教えてくれた。イカは痛みを感じない。やつらには「痛覚」ってもんがない。痛いだとか、苦しいだとか、そういう気持ちはないんだそうだ。でも、生きたままバラバラに、食べられていくイカを見る、僕の心は痛かった。僕の胸は苦しかった。これは一体なんだろう。僕はちよっと、ヘンなんだ。心に、胸に、痛覚があるんだ。今だって。ぴびび、すら使えない、こんな病気のメスをおいてはいけない。ほっとけない。メスは何頭もいるけれど、どうしても気になって仕方ない」

マッコウ、恋女房に寄り添う。

恋女房 「あれ？」
マッコウ 「あれ？」
メスたち 「あれあれ？」
恋女房 「私のおなかに？ どうやらこども？」
メス1 「事情が変わった。連れていこう」
メス2 「かわいい赤ちゃん、生むまでは」
メス1 「こどもは宝。なにより大事」
メス2 「しっかり守って、生ませよう」
マッコウ 「びびび、が使えないんだ。この僕たちから離れるな。離れたら最後、海の迷子」

マッコウ 「び、び、び…」
メスたち 「び、び、び…」

旅を続けるマッコウクジラたち。
突然、恋女房が姿を消す。

マッコウ 「メスー。メスー」

探そうとするマッコウ。

【02】

そこへザトウクジラたちがやってくる。リーダーを先頭に渦を作る。

リーダー「まわれや、まわれ」
みんな「まわるぞ、まわるぞ」
リーダー「まわれや、まわれ」
みんな「まわるぞ、まわるぞ」
リーダー「口からあぶくを吐きながら」
みんな「くるぐる、まわって、うず潮つくり」
リーダー「サバやニシンや、カラフトシヤマ」
みんな「おいこみ、まるのみ、たべちまおう」
リーダー「ザトウクジラの得意技」
みんな「バブルネット・フィーディング」

ザトウクジラたちの作った渦の中に、マッコウ。

みんな「リーダー。うずの中に、クジラがかかりました」
リーダー「クジラだと」
みんな「真っ向から来た、マッコウクジラです」
リーダー「やい、マッコウクジラ。どうして俺たちの邪魔をした」
マッコウ「ザトウクジラたち。僕のメスを知りませんか？」
リーダー「お前のメスだと？」
マッコウ「メスのマッコウクジラです」
リーダー「メスのマッコウクジラだと？」
みんな「知らないなあ。知らないなあ」
マッコウ「群れからはぐれた、メスクジラ。僕ら、ばらばら、大海原」
リーダー「びびび、を使うんだ、お前」
マッコウ「びびび、が使えない、あいつ」
リーダー「じゃあ、見つからない。あきらめな」

そこへ、シャチ（サブロウ）がやってくる。

サブロウ「へっへっへ」
みんな「シャチだーっ。ひいーっ」

ザトウクジラたち、逃げ出す。一頭のザトウクジラが捕まってしまう。
取り残される、マッコウ。

そこへ、ミンククジラたちがやってくる。リーダーを先頭に行進する。

リーダー「すすめ、すすめ」
みんな「すすむぞ、すすむぞ」
リーダー「すすめ、すすめ」
みんな「すすむぞ、すすむぞ」
リーダー「口を大きくあけたまま」

みんな 「すいすい泳いで、どこまでも」
リーダー 「小さなオキアミ、プランクトン」
みんな 「みずごと、まるのみ、たべちまおう」
リーダー 「ミンククジラの得意技」
みんな 「これがランジ・フィーディング」

ミンククジラたちの進行方向に、マッコウ。

みんな 「リーダー。目の前に、クジラが現れました」
リーダー 「クジラだと」
みんな 「マッコウから来た、マッコウクジラです」
リーダー 「やい、マッコウクジラ。どうして俺たちの邪魔をした」
マッコウ 「ミンククジラたち。僕のメスを知りませんか？」
リーダー 「お前のメスだと？」
マッコウ 「メスのマッコウクジラです」
リーダー 「メスのマッコウクジラだと？」
みんな 「知らないなあ。知らないなあ」
マッコウ 「群れからはぐれた、メスクジラ。僕ら、ばらばら、大海原」
リーダー 「びびび、を使うんだ、お前」
マッコウ 「びびび、が使えない、あいつ」
リーダー 「じゃあ、見つからない。あきらめな」

そこへ、シャチ（サブロウ）がやってくる。

サブロウ 「へっへっへ」
みんな 「シャチだーっ。ひいーっ」

ミンククジラたち、逃げ出す。一頭のミンククジラが捕まってしまう。

取り残される、マッコウ。

マッコウ 「メスー。メスー」

一頭のダイオウイカが泳いでくる。

イカ 「ぐにやり…」

マッコウ、超音波で攻撃する。

マッコウ 「びびび…」

イカ 「ふーっ。ふーっ」（スミを吐く）

ダイオウイカを捕まえるマッコウ。

マッコウ 「…」

【03】

マッコウクジラのメスたち、こどもたちが、超音波を出して現れる。

メスたち 「びびびび…」

マッコウ 「びびび…」

メス1 「帰ってきたわ。帰ってきたわ」

メス2 「遅かったじゃない。遅かったじゃない」

マッコウ 「だめだ。どこにも見つからない。みおもの僕のメスクジラ」

メス1 「いいじゃないの。一頭くらい」

メス2 「メスはまだまだいるんだし」

メス1 「こどももたくさんいるんだし」

メス2 「おなががすいたわ。すいた。すいた」

マッコウ 「イカをつかまえてきた」

メスたち 「さすがね、オス。さすがだわ。いただきまーす」

メスたち、こどもたち、イカを食べる。

メスたち 「おなががすいたわ。すいた。すいた」

マッコウ 「もつと捕まえてくるよ」

メスたち 「いってらっしゃーい」

マッコウ、一頭だけになる。

マッコウ 「イカを探しているながらも、消えたあいつを探してる。

メスは何頭もいるけれど、消えたあいつは、ただ一頭。

おなかのこどもも、ただ一頭…」

【04】

シャチの群れが現れる。

リーダー「ひっひっひ」
みんな「ひっひっひ」
リーダー「ひっひっひ、ったら」
みんな「ひっひっひ」
リーダー「するどいキバに、つよいアゴ」
みんな「ヨロイのような皮下脂肪」
リーダー「おまけに賢い、すばしっこい」
みんな「全身、筋肉、ムッキムキ」
リーダー「ついたあだ名は、キラールホエール」
みんな「海の殺し屋。それがシャチ」

シャチたちの進行方向に、マッコウ。

みんな「リーダー。目の前に、クジラが現れました」
リーダー「クジラだと」
みんな「マッコウから来た、マッコウクジラです」
リーダー「くっちまおう」
みんな「くっちまおう」
リーダー「いやいや、よせよせ。あいつはオトナ」
みんな「オトナのオスだ」
リーダー「襲うならメスカ、コドモだろう」

マッコウ「びびび…」

みんな「何をしてるんだ」
リーダー「超音波だ」
みんな「チョウオンパ？」
リーダー「近くメスやらコドモやら、あれで危険を知らせてる」
みんな「近くにいるのかメスやらコドモ。くっちまおう。くっちまおう」
リーダー「よせよせ。今のびびびで、もう逃げた」
マッコウ「シャチたち。僕のメスを知りませんか？」
シャチ「お前のメスだと？」
マッコウ「メスのマッコウクジラです。おなかの中には、こどもがいます」
リーダー「さつき、くったよ」
みんな「さつき、くったな」
リーダー「いやいや、さつきくったのは、みおもじゃない。それにオスだった、ガキだった」

一頭のシャチ「サブロウ」がやってくる。

サブロウ「へっへっへ」
リーダー「なんだお前か？」

サブロウ 「みおものメスのマッコウクジラ。
そいつなら、俺が知っている」
マッコウ 「一体、どこに行ったんだ」
サブロウ 「捕まったのさ、捕鯨船」
マッコウ 「ホゲイセン？ それはなんなんだ」
リーダー 「また見に行ったのか、捕鯨船」
みんな 「いくら止めても聞きやしない」
リーダー 「人間好きにも程がある」
マッコウ 「ニンゲン？ それはなんなんだ」
リーダー 「こいつはおかしい。おかしいシャチだ」
みんな 「関わらないほうがいい」

シャチたち、サブロウを残し消える。

マッコウ 「ホゲイセン？ ニンゲン？ それは一体なんなんだ？」
サブロウ 「オスのオトナのマッコウクジラ。気になりや、そこまで一緒に行くか？」
マッコウ 「行かせておくれ、シャチのオス」
サブロウ 「俺はシャチのオスじゃない。俺の名前は、サブロウだ」
マッコウ 「なんだそれは。シャチは、シャチだろう」
サブロウ 「他のシャチと区別するために、名前をつけたのさ」
マッコウ 「区別をつける理由はなんだ」
サブロウ 「誰か何かを探すときに、必要なのさ。人間どもがやることだ」
マッコウ 「ニンゲンども…？」
サブロウ 「ついてきな」

サブロウ、マッコウと泳ぎ出す。

サブロウ 「捕まっちまったそのメスに、特別な気持ちがあるんだろう」
マッコウ 「そうだ。胸が痛いんだ」
サブロウ 「胸が痛い！ それは、恋っていうもんだ」
マッコウ 「コイってなんだ？」
サブロウ 「並の海洋生物にや、持ち合わせない代物さ」
マッコウ 「恋はどうかは知らないが、僕は会いたくてたまらない。
みおもの僕の、メスクジラ」

恋女房が現れる。

サブロウ「ああ、いた。いた」

恋女房「あいたたた…」

サブロウ「いた、いた、いたぞ」

恋女房「あいたたた…」

サブロウ「あれがお前の恋女房」

マッコウ「メスー」

恋女房「オスー」

マッコウ「こんなところだなにしてる？」

恋女房「見ての通りです」

恋女房の横には、捕鯨船（キヤッチャーボート）がいる。

捕鯨船「ブーン」

マッコウ「新しいオスと駆け落ちを？」

サブロウ「これは捕鯨船。キヤッチャーボート」

マッコウ「ホゲイセン？ キヤッチャーボート？」

サブロウ「人間が操るフネという機械。こいつにさらわれ、食べられるんだ」

マッコウ「そりゃあいけない。逃げないと」

サブロウ「いやいや、無理だ。」

モリがぶすりと土手っ腹。深く刺さって、もう抜けない」

恋女房「あいたたた…あいたたた」

サブロウ「さあ、もういいだろう。逃げるぞ。」

ここにいたんじゃ、俺たちも捕まる」

マッコウ「待ってくれ。待ってくれ」

サブロウ「どうするんだ。捕鯨船を襲うのか。」

『白鯨』モビー・ディックのように」

マッコウ「それで助けられるのか？」

サブロウ「いや、無理だ。無駄死にだ」

マッコウ「…」

恋女房「ごめんなさい。せつかく側においてくれたのに、

何もできない、情けない。

せめて元気なこどもを生めば、群れの役に立てるかど、

たくさん太って頑張った。

でももう無理です。死ぬのです。

ドジでのろまなメスクジラ。ごめんなさい。ごめんなさい」

恋女房、捕鯨船に連れて行かれる。

捕鯨船「ブーン。ドドドド…」

マッコウ「メスー」

サブロウ「だめだ、追うな。諦めな」

マッコウ「なんともいえない、この気持ち。

僕は、どうしても、あいつと、一緒にいたい」

サブロウ「メスは何頭もいるんだぜ」

マッコウ「それでも、側にいたいんだ。

今際の際の、その瞬間。最期の時まで見届けたい」

サブロウ「見届けたい！ やっぱり、それは恋ってもんだ。

へんなクジラだ、気に入った。

恋しているなら、妙案がある。

恋する海洋生物の、強い味方に聞いてみよう。

『海の魔女』に聞いてみよう」

マッコウ「海の魔女？」

サブロウ「恋するリトル・マーメイド。人間の姫に変えたという伝説の魔女さ」

マッコウ「伝説の魔女…」

サブロウ「ひかえろ！」

海の魔女が現れる。

【09】

魔女「海を泳ぐ生き物は、陸を目指して手足が生えた。

陸を走る生き物は、空を目指して翼が生えた。
しかして、お前らクジラの祖先。

かつては陸で暮らしながらも、肉食獣の危険を逃れ、
ふたたび海へと戻ってきた。いわば、

海への出戻り、里帰り。レボリューション・オブ・エボリューション。

その甲斐あって、巨大なマンモス、サーベルタイガー滅ぼした、

三たびの氷河期乗り越えて、今では海の支配者階級。

おめでとう。海の魔女です（マッコウに）

マッコウ「…」

魔女「人間どもとて、同じこと。

するどい牙や爪を捨て、手先の器用さ武器にして、

今では地上の支配者階級。

おめでとう。海の魔女です（客席に）

マッコウ「…」

魔女「やつらは陸ではあきたらず、獲物を求め、資源を求め、

この海にまでやってきた。

なんの因果かお前のメスを、生け捕り、さらっていきおった」

マッコウ「メス—」

魔女「マッコウクジラよ。

オスのオトナのマッコウクジラよ。

マッコウクジラたる姿を捨てて、あの人間に大変身。

捕鯨船に乗り込めば、メスの最期に立ち会える」

マッコウ「すぐにそうしてくださいな」

魔女「タダじゃだめだ。何かよこしな」

マッコウ「何か？」

魔女「恋するリトル・マーメイドは、人間になる代わりに大切な声を失った。

お前にとって、とっても大切な、超音波をいたたくよ」

マッコウ「びびび…これかい？」

魔女「それでもいいなら、ちょっとだけ、人間にしてやろう」

マッコウ「…わかった」

サブロウ「おいおい、いいのか、超音波。なくなっちゃったら困るだろ」

マッコウ「それでも、あいつのそばにいたいんだ」

サブロウ「くうー（感激）」

魔女「よおし。アブダカタブラ…アブダカタブラ…」

魔女、マッコウから超音波を奪う。

マッコウ「あー超音波が使えなくなった」

サブロウ 「旅は道連れ、世は情け。俺も一緒に行かせてくれ」

魔女 「お前はダメだ。今まで何回、人間にさせてやったと思ってるんだ」

マッコウ 「え？そうなの？」

魔女 「こいつは事あるごとに人間に化けて、あの捕鯨船に乗り込んでいるのさ」

サブロウ 「リピーターです」

魔女 「もうだめだよ」

サブロウ 「(マッコウに) お前からも頼んでくれよ。

人間も捕鯨船も知らなかったお前だ。

俺と一緒にいったほうが、安心だろう」

マッコウ 「お願いします。このシャチも人間にしてください」

魔女 「ならば、シャチよ。人間にする代わりに、

お前には、後でやってもらうことがある」

魔女、サブロウに耳打ち。

魔女 「ヒソヒソヒ、ヒソヒソヒソヒ、ヒソヒソヒ…」

さあ、果たしてお前に、それができるか？」

サブロウ 「わかったわかった。できるから、やるから、

人間にしてくれ」

魔女 「いいだろう。人間に化けるこの魔法、

マッコウクジラの望みが叶えばすぐ溶ける」

海の魔女、魔法をかける。

【07】

マッコウとサブロウ、捕鯨船の甲板にいる。

マッコウ「ここは海の上」

サブロウ「舟の上」

マッコウ「俺のメスは、どこだ」

サブロウ「お前のメスは、あそこだ」

上を見上げるマッコウ。メスクジラ（恋女房）が釣られているらしい。

マッコウ「なんだありや？」

サブロウ「ありやくジラ」

マッコウ「あれがクジラ？ あれが俺たちクジラなら、

人間ってやつは、なんて小さいんだ。

こんな小さいやつらに捕まったのか」

ひとりの人間がやってくる。

サブロウ「ほら、あれが人間だ」

マッコウ「人間か」

人間「うわあ。シャチ。お前、また来たのか」

サブロウ「また来たさ。それに俺は、シャチじゃない。俺の名前はサブロウだ」

人間「うるせえ、シャチのくせに名前なんて生意気だ」

マッコウ「知り合いなのか」

サブロウ「知り合いさ。初めてできた人間の友達だ」

人間「友達なんかじゃない」

サブロウ「いわゆる『朋輩（ほうばい）』ってやつだ」

人間「朋輩なんかじゃない」

サブロウ「いつだったか、間抜けなこいつ、

捕鯨船で足を滑らせ、海にドボンと落ちてきた。

そこに通りかかった俺は、初めて人間の姿を見た。

ラッコでも、ペンギンでも、オットセイでもない姿。

なんておもしろいんだろう。

俺はこいつとじゃれながら、船に戻してやったのさ。

お前は命の恩人だ。感謝しろ」

人間「その節はどうも…」

サブロウ「えっへん」

人間「おい、シャチ。こいつは何者だ」

サブロウ「こいつは、俺の友達だ」

人間「そいつもシャチか？」

サブロウ「こいつはクジラ。マッコウクジラ。

お前たちが捕まえた、あのメスクジラの旦那さん」

人間「な、なんだ…俺たち人間に、復讐でもするつもりか…」

サブロウ「そうじゃない。死にゆく女房の顛末を、ただ見届けたい、それだけさ」

人間 「邪魔はするなよ。俺たちの仕事」
サブロウ 「邪魔はしないさ。むしろ手伝う」
人間 「やめろ。隠れろ。」

乗組員が増えたなんて、周りに知れたら大事だ」

やってくるクジラ撃ちと社員。

クジラ撃ち 「引き上げるとは、どういうことだ。」

クジラの群れはすぐそこだ」

社員 「母船からの連絡だ。捕獲制限が迫ってる。」

今回の漁は、この一頭でお終いだ」

撃ち 「そんなの知るか。俺はクジラが殺したいんだ」

サブロウ 「ありや誰だ」

人間 「クジラ撃ちの名人だ」

マッコウ 「あいつが、僕の女房を？」

撃ち 「マッコウ、ミンク、ナガスにザトウ、クジラと名のつくものならば、

南氷洋の果てまでも、捕鯨船あやつり、追いかけてまわし、

捕鯨砲ドカンとぶっ放し、手当り次第に捕まえる。」

船団長も、船長も、腹の中では思ってる。」

会社の専務も重役も、心の中では望んでる。」

獲れるもんなら、どこまでも、天井知らずの捕獲量。」

だから俺は規定を犯す。ルールを破り、クジラを殺す。」

獲るなど言われても止められない。懲罰処分、だまらっしゃい。」

クビにできるならやってみる。」

捕鯨船、乗せたら、日本一。捕鯨砲、撃たせりや、世界一。」

クジラ殺しにかけちゃ、天下一の腕前だ」

社員 「クジラ撃ちだってサラリーマン。会社の方針に従いやがれ」

去っていくクジラ撃ちと社員。

人間 「あぶなかったー。とりあえず、ここに隠れてろよ」

マッコウ 「（無視して）島だ。島が見えてきた」

サブロウ 「ありや島じゃない。母船だ」

マッコウ 「ボセン？」

サブロウ 「これからお前の恋女房をあっちの船に移すのさ」

マッコウ 「どうやって？」

サブロウ 「（説明）ういーん。がしーん。ずるずるずる…」

マッコウ 「わかんないよ」

サブロウ 「俺もわかんないよ。おい、人間。教えてくれ」

人間 「よし。遠洋漁業にクジラとり、水産加工は日本一、

株式会社大洋漁業、入社10年目、この人間様が教えてやろう。

この捕鯨船で捕まえた、クジラの尾っぽをクローで挟み、

母船の後ろのスリップウェイを、ずるずるすべらせ引き上げる。

甲板の上に乗せたなら、いよいよ始まる、解体作業」

マッコウ 「カイトイ？」

人間 「お前のかみさんをバラバラにするんだ」

マッコウ 「バラバラにして食べるのか」

人間 「食べはしない、皮、肉、骨、油。バラバラにして持ち帰るんだ」

マッコウ

「なるほど。群れにもち帰るんだな。」

人間 「僕らと一緒に。是非見せてくれ」

「お安いご用さ…いや駄目だ。」
母船には船長がいる。見つかったら大変だ」

サブロウ、マッコウ、母船に乗り込む。

サブロウ「ここが母船かあー」

人間 「おおおい、勝手に移動するなー」

解体の名人と人間の男たち、準備に取り掛かる。

解体 「来たぞ、来たぞ。クジラが来たぞ。クジラをバラすぞ、今すぐに。

デカイ包丁、かまえたならば、俺の合図でとりかかれ。

下手なやつらはさがってる。何度も刃物を入れたなら、

肉が傷つき、値段が落ちる。やるなら綺麗に一発勝負。職人技を御覧じろ。

なるほど、マッコウクジラのメスか。ものの10分で始末できらあ！

手羽（てっぱ）と背びれと尾っぽをおとし、皮を剥いたら、脂肪を削いで、

それからいよいよ肉を切る。骨も、油も、無駄にはするな。

ヒゲや目玉や脳みそ、内臓、捨てるどころなんてありやしない。

クジラは泳ぐ、金の塊」

人間たち、解体名人の指揮の元、クジラを解体していく。

マッコウ「ああー…僕のメスー」

あれ…こどもはどうするんだ？」

サブロウ「こども？」

マッコウ「おなかの中のこどもだよ」

クジラの胎児が、甲板に捨てられている。

解体 「こまった。しまった。やっちまった。

こぶりのマッコウクジラだが、腹を裂いたら、赤ん坊。

こいつは『みおも』の母クジラ。

大きさ、重さは規定通り。国際ルールじゃセーフだが、

こまった。しまった。やっちまった。

子供のクジラは獲っちゃいかん。厳しく言われていたはずなのに。

あのクジラ撃ち…つい間違っつて、子持ちを撃ちやがったな。

まずいぞ。見つかりや厄介だ。

どうする？ どうなる？ どうもしない」

解体の名人、クジラの胎児のへソの緒を切る。

解体 「へソの緒、切って、なかったことに。

見なかったことにして、捨てちまおう。

おい、そのお前。この赤ん坊、捨ててこい。

こっそり隠して、こっそり捨てる。

なあに、こいつはどうせ死ぬ。生かしていたってしょうがない。

早く、捨てる。始末しろ」

命じられた男（ナンゴウ）、胎児を持って、捨てに行ってしまう。

マッコウ 「ああっ、こどもー。こどもー」

人間 「やめろ。いいか、ここは母船だ。」

母船には船長がいる。絶対に、絶対に、船長にだけは見つかるな。

あ、船長！」

船長にだけ見つかった。

船長 「見ない顔だな。君は作業に戻りたまえ」
人間 「ひー」（立ち去る）

船長 「…お前、クジラだな」

マッコウ 「なんだって？」

船長 「お前はシャチだ」

サブロウ 「何故分かる？」

マッコウ 「まさか、お前もシャチなのか？」

船長 「いいや」

マッコウ 「まさか、お前もクジラなのか？」

船長 「いいや。俺は、ウニだ」

マッコウ 「ウニ？ ウニって何だ？」

船長 「え？ 知らないの？ 黒くて、まるくて？ トゲトゲしてて…」

サブロウ 「は？ は？」

船長 「そうかー。クジラもシャチも、デカイから。ウニとか興味ないかー」

船長 「昔は深い海の底、ころころ転がるウニだった。」

人間共がこの海を、汚したり荒らし過ぎぬよう、

海の魔女に送り込まれたのだ。今ではこの母船の船長」

サブロウ 「すげー」

船長 「すごいんだ。出世したんだ。お前たちは何の為に人間になった？」

サブロウ 「あのメスはこのいつの恋女房。最期を見届けようってことだ」

船長 「それならしかと見届けよ。捕まったクジラの最後の姿。」

まず、肉はあっちでああなって、皮はこっちでこうなって、

油はそっちでそうなって、骨はどっちでどうなった？」

サブロウ 「すげー。船長、説明ヘタっすね」

船長 「ヘタなんだ」

サブロウ 「それでよく船長になれましたね」

船長 「よく船長になれたもんだ。不思議だ」

補足説明してくれる人、現れる。

補足 「すみません。なんかいま、船長さんが頼りない感じになってますけど、

実際の捕鯨母船の船長さんというのは、とても優秀な方々なんですよ。

今これは演劇なので、オシバイなので、

こんなヘンな感じになってます。実際は違いますからね」

海の魔女、現れる。

船長 「あ、海の魔女だ」

海の魔女 「マッコウクジラよ。人間の世界、メスの最期、

しっかりとばっちり見届けたな。

もう海に帰ってきなさい」

サブロウ 「やだやだ！ まだ人間でいたい！」

マッコウ 「気が済みました。ありがとう。海に戻ります」

サブロウ 「うわーん（悔しい）」

マッコウ 「メスだけじゃなく、こどもの最期も見れましたし…」

魔女 「こどもだと？」

マッコウ 「生まれ損ねた僕のことでも。

海に捨てられたみたいですよ」

魔女 「生まれ損ねたお前のこども…

まだ海には帰ってないぞ」

マッコウ 「え？」

魔女 「海は何でも知っている。

お前のこどもはまだ船だ」

サブロウ 「さっきの男が、連れ去ったんだ」

マッコウ 「そんな…」

魔女 「マッコウよ。気がかりならば、こどもの最期も見届けよ」

海の魔女、消える。

サブロウ 「よっしゃー。さっきの男を探しだそう」

マッコウ 「探すたって、どうやって」

サブロウ 「母船の中には人間が、ざっと千人は乗っている。

区別がつかない、おぼえられない。こんな時に、名前を使うんだ」

マッコウ 「なるほど」

サブロウ 「おい、人間」

人間 「なんだよ、シヤチ」

サブロウ 「俺はシヤチじゃねえ、サブロウだ」

人間 「船長は大丈夫だったのか？」

サブロウ 「大丈夫だった。あいつ、ウニだった」

人間 「ウニ？え？ウニ？」

サブロウ 「それはいいから、さっき赤ん坊を捨てた男、

名前は一体なんだ？」

人間 「さっきの男？ あいつは、たしかナンゴウムラ…」

サブロウ 「ナンゴウムラ？」

マッコウ 「ナンゴウムラ？」

サブロウ 「なるほど、それが名前だな？」

人間 「いや、名前というか…」

マッコウ 「よし、探そう」

【09】

母船の中を探しまわる二人。「ナンゴウムラー。ナンゴウムラー」
食堂。大勢の人が食事をしている。

マッコウ 「ここはどこだ？」
サブロウ 「食堂だ」
食堂の男 「クジラうめえー」
マッコウ 「ナンゴウムラを知ってますか？」
食堂 「ナンゴウムラ？知ってるけど」
マッコウ 「ナンゴウムラはどこですか？」
食堂 「方角的には、あっちかな？」
マッコウ 「あっちだー」

医務室。医者と病人がいる。

マッコウ 「ここはどこだ？」
サブロウ 「医務室だ」
医者 「静かにしろ、バカモンが」
マッコウ 「ナンゴウムラを知ってますか？」
医者 「ナンゴウムラ？知ってるけど」
マッコウ 「ナンゴウムラはどこですか？」
医者 「方角的には、あっちかな？」
マッコウ 「あっちだー」

船長室。船長がいる。

マッコウ 「ここはどこだ？」
サブロウ 「船長室だ」
マッコウ 「あ、本当だ。船長だ」
船長 「船長だ。ウニだ」
サブロウ 「一番、有力な情報が手に入りそうだ」
マッコウ 「ナンゴウムラを知ってますか？」
船長 「知らない」
サブロウ 「知らないのかよ。」
サブロウ 「それでよく船長になれたな」
船長 「本当にね」

クジラ撃ちの部屋。クジラ撃ちが熟睡している。

マッコウ 「ここはどこだ？」
サブロウ 「何だこの部屋は」
クジラ撃ち 「むにやむにや…ぐにやぐにや…」 (熟睡)
サブロウ 「あ、こいつさっきの、クジラ撃ちの名人だ」
クジラ撃ち 「クジラが二頭…クジラが二頭…クジラを殺すのは楽しいなあ…」
サブロウ 「おいおい、なんか、やべえ夢見てるぞコイツ！」

【10】

冷凍船にやってくる。

マッコウ「ここはどこだ？」

サブロウ「冷凍船だ。床も、壁も、天井も、部屋中キンキンに凍ってる。動いているのは人間と、ベルトコンベアただふたつ」

冷凍船で働く人たち。クジラの肉を箱詰めにする。

冷凍「寒い、冷たい、帰りたい。そんな文句はよしとくれ。

寒いと言えば、寒くなる。冷たいと言えば、なお冷たい。くち動かさず、手を動かせ。頭じゃなくて、身体を使え。

母船でバラバラに解体されて、ぴったりキレイに箱詰めされた、クジラのお肉がやってくる。コンベアに乗ってやってくる。

ここではそいつを凍らせる。てめえが凍っちゃ意味がない。さあ、動こうぜ。働こう。

腕を止めたら、即座に凍る。足を止めたら、凍え死ぬ」

男（ナンゴウ）を見つける。

マッコウ「いたぞ。包丁を研いでいる」

冷凍「おい、いつまで包丁を研いでいやがる。

包丁研ぎで、サボってるな」

ナンゴウ「すみません。あんばいが悪いんです」

冷凍「雪国生まれじゃ、こんな寒さは平気だろう」

ナンゴウ「すみません。あんばいが悪いんです」

冷凍「困った奴だ。医務室で薬をもらってこい」

ナンゴウは、医務室に行く。それを追う、マッコウとサブロウ。

ナンゴウ「頭は痛い…胸が苦しい…足が重い。

仕事も何にも手に着かねえ…」

医者「病気だな」

ナンゴウ「病気ですか」

医者「懐郷病（かいきょうびょう）だ」

ナンゴウ「カイキョウビョウ？」

医者「英語で言うならホームシック」

ナンゴウ「ホームシック」

医者「つまり、単なる、さみしがり」

ナンゴウ「さみしがり」

医者「船で暮らして数ヶ月。ふるさとはなれて何千里。

家族に会いたいサミシサで、心と身体がおかしくなった」

ナンゴウ「はあ…」

医者 「お前、クニに、女房いるだろ」
ナンゴウ 「はい」
医者 「こども、いるだろ」
ナンゴウ 「はい。…え、どうしてわかるんですか？」
医者 「そういうやつがなるんだよ」
ナンゴウ 「どうしたら治るんでしょうか？」
医者 「これは薬じゃ治らない。耐えるしかないさ」
ナンゴウ 「はあ…」

歩いているナンゴウを追うマッコウ、サブロウ。

ナンゴウ 「カイキョウビョウ…ホームシック…」

マッコウ 「ナンゴウムラ」

ナンゴウ 「え？」

マッコウ 「お前がナンゴウムラだな」

ナンゴウ 「誰だ、あんた？」

マッコウ 「赤ん坊はどうした？ 捨てると言われた、クジラの赤ん坊は？」

ナンゴウ 「海に投げた」

マッコウ 「嘘だ。海には帰ってない」

ナンゴウ 「嘘じゃない」

マッコウ 「海は何でも知っている。本当のことを言ってくれ」

ナンゴウ 「本当のこと…」

サブロウ 「さては、食べたな、赤ん坊」

ナンゴウ 「食べちゃいない、そんなことはしない」

マッコウ 「じゃあどこにいる？」

ナンゴウ 「どこって…」

ナンゴウ 「…俺たちの部屋に来てくれ」

【11】

ナンゴウの部屋に行く一同。先輩たちがいる。

ナンゴウ 「お疲れ様です…」

先輩 「おい。そいつら誰だ。ともだちか？」

ナンゴウ 「知りません」

先輩 「は？知らないやつ入れるな」

ナンゴウ 「すぐ終わりますから…」

ナンゴウ 「ほら、これだ」

男、毛布に包んだクジラの胎児を取り出す。

マッコウ 「こどもー」

ナンゴウ 「もう死んでる。でも捨てた時は少しだけ、生きていたんだ。動いてた。

海に投げようとしたけど、どうしても、できなかった。

動かなくなった今だって、どうしても、捨てられない。

だから、こうして、毛布にくるんで、俺のベッドに寝かせてるんだ」

先輩 「捨てちまえ、気持ち悪い」

サブロウ 「海に帰してやってくれ。そうすりゃシャツが食ってやる」

ナンゴウ 「ああ…そうだな。俺が持っけていても仕方ない」

先輩 「そうだ。そうだ」

マッコウ 「ありがとう。大切にしてくれて、

海で生まれ損ねたこいつだが、陸であんたに大事にされて、

よかったような気がするよ」

サブロウ 「はあ？」

マッコウ 「海には帰さなくていい。お前の側に置いてくれ」

先輩 「…いや、捨てるよ」

ナンゴウ 「わかった」

先輩 「なんでだよ」

ナンゴウ 「ずっと俺の側に置いておく」

先輩 「いやいや、なんで。意味がわかんねえよ」

サブロウ 「でもこのままじゃ腐っちまうぞ」

ナンゴウ 「そうだな。どうしましょう」

そこに人間。

サブロウ 「おい。人間」

人間 「なんだよ、シャツ」

サブロウ 「俺はシャツじゃねえ、サブロウだ」

人間 「さっきの男は見つかったのか？」

サブロウ 「男は見つかったし、こいつの子供もゲットした（胎児）」

人間 「なにやってんだよ、捨てるよバカ」

ナンゴウ 「捨てません。ずっと側に置いておきます」

人間 「何だこいつー」

サブロウ「こいつが腐らない方法はないか？」

人間「冷凍すりや、いくらでも大丈夫だぞ」

サブロウ「よし、お前、今日から冷凍室で寝泊まりしろ」

ナンゴウ「わかった。って、いやいや赤ん坊だけじゃなくて、俺まで凍っちゃうだろ」

サブロウ「ナイス、ツッコミ」

人間「医務室に行けばなんかあるかもな」

医務室。

医者「男ばかりのこの船で、医務室にいる俺は、産婦人科医。

妙な話だが人手が足りず、医者なら何でも構わんと、頼み込まれて乗り込んだ。なんの因果か、捕鯨旅団。

しかし、クジラの身体ってやつは、医学的見地から見ても興味深い。

山のように大きい身体、引き裂いてみれば人間と同じ。

心臓、脳みそ、その他の臓器、大きさ違えど、形は同じ。

俺たち医者が顕微鏡で、チマチマ見てきた血管や神経、すべて肉眼で見ることが出来る。

クジラの身体こそ、医学研究にはもってこいだ

…とはいえ、船の上での雇われ仕事。殺人的な忙しさ。

研究なんてほぼ無理だ。怪我や病気は日常茶飯事。面倒ごとは四六時中…」

ナンゴウ、クジラの胎児を持つてくる。

医者「…なんだ？ 怪我か、病気か、冷やかしか？

どうした？ クジラの胎児？

みおもの母親クジラから、出てきたわけだな、興味深い。

こいつを腐らせたくないだつて？ クニまで持って帰る気か？

クニの土産の定番は、クジラのヒゲや骨に牙。

クジラの胎児など前代未聞。

だが、まあいいさ。興味深い。やってやれないことはない。

クニに持って帰ったらいい。きっと誰もが驚くぞ。

クジラの胎児をホルマリン、防腐剤ひたして瓶詰めだあ」

クジラの胎児、インスタントコーヒーの瓶に入れられる。

ナンゴウ「瓶詰めだあつて言つてたけど…これネスカフェの空瓶じゃないか？」

人間「うまくやってくれたんだ。感謝しろ。

あ、専務が呼んでる。はいーっ」（去っていく）

サブロウ「じゃあな、ナンゴウムラ。達者でな」

ナンゴウ「ナンゴウムラ？ 俺の名前は『ナンゴウムラ』じゃない」

マッコウ「え？ そうなの？ じゃあ、ナンゴウムラってのは…」

ナンゴウ「ナンゴウムラってのは、俺の村の名前だ」

マッコウ「ムレ？」

ナンゴウ「群れじゃない、村だ」

マッコウ「ムラ？ ムラってのはなんだ」

ナンゴウ 「村は村だ。みんな一緒に暮らしてる場所だ」
マッコウ 「なんだ、やっぱり群れのことじゃないか。」

そのナンゴウムラっていう群れに、お前のメスや子供がいるんだろ」

ナンゴウ 「メス？」

サブロウ 「恋女房だ」

ナンゴウ 「ああ、もう半年は会ってない」

マッコウ 「ハントシ？」

サブロウ 「朝が来て、夜が来て、それを繰り返す百回以上」

マッコウ 「そんなに会えてないのか」

ナンゴウ 「でもいいんだ。俺が働けば、あいつが楽できる」

海の魔女が現れる。

海の魔女 「マッコウクジラよ。人間の世界、メスの最期、

しっかりとばっちり見届けたな。

もう海に帰ってきなさい」

サブロウ 「やだよ！ まだ人間でいたい！」

マッコウ 「気が済みました。ありがとうございます。海に戻ります」

サブロウ 「うわーん（悔しい）」

魔女

「いや、待て…。海は何でも知っている。

マッコウクジラよ。お前、まだこの船に未練があるな」

マッコウ

「お前の子どもを捨てた男、あいつの群れを見たいのだから」

魔女

「はい…僕の子ども。あの男の群れ。とても気になります」

魔女

「マッコウよ。気がかりならば、それも見届けよ」

サブロウ

「じゃあ僕もついて行っても…」

魔女

「いいだろう」

サブロウ

「よっしゃー」

マッコウ

「こうして、マッコウクジラとシャチの」

サブロウ

「捕鯨の旅が始まったのだ」

「日新丸捕鯨船隊行進曲」（昭和十一年発表）が流れる。

マッコウとサブロウ、捕鯨母船での日々を過ごす。

【12】

食堂。

サブロウ「さあ、飯にしようぜ」

マッコウ「うわー、今日もクジラだー」

人間「クジラ嫌いなのか？ いつも食べてないけど」

マッコウ「共食いになっちゃうからさー」

人間「ああ、そりやそうか。ハハハ…」

クジラ撃ちが食事をしていた。

クジラ撃ち「うまいなあ。うまいなあ。ナガスクジラの肉はうまい。

一度ナガスを食べたなら、ミンククジラはまずくて食えん」

マッコウ「あつ、あいつ、僕の女房をアレしたやつだ」

マッコウたちを睨むクジラ撃ち。

撃ち「見ない顔だな。あっちに行け」

人間「ひー」（立ち去る）

撃ち「お前、クジラだな」

マッコウ「なんだって？」

撃ち「お前はシャチだ」

サブロウ「何故分かる？」

マッコウ「まさか、お前もシャチなのか？」

撃ち「いや」

マッコウ「まさか、お前もクジラなのか？」

撃ち「いや」

マッコウ「ってことは…ウニ？」

撃ち「違う」

撃ち「やい、マッコウクジラ。俺のこの目を見てみる。

このつぶらな瞳に覚えはないか？」

マッコウ「お前は…まさか、ダイオウイカ」

撃ち「ぐにやり。マッコウクジラの格好の獲物、俺はダイオウイカだった。

お前の仲間に生きたまま、身体をぐちゃぐちゃに喰いちぎられた。

何とか運よく逃げのびたが、くたばりかけの死に損ない。

海の魔女に助けを乞い、人間として命を繋げてもらったのさ」

マッコウ「まさかお前…僕の恋女房が、みおもだと知って撃ったのか？」

撃ち「ああ、あのメスことか。

マッコウクジラの顔色ばかりうかがってきた俺ら。

見ればわかるさ。知ってたさ。あのメスの腹に赤子がいたことを」

マッコウ「どうして殺した。子持ちのクジラは捕らないはずだ」

撃ち 「それは人間共の道理。俺は殺せるだけ殺せれば本望だ。

お前らだっけそうだろう。俺たちイカを殺してばかり」

マッコウ 「お前のように無意味に命を取りはしない。

家族の為に。群れのため。村の為に」

撃ち 「ふーっ。ふーっ」

マッコウ 「？」

撃ち 「…おっと、ついつい昔の癖でスミを吐こうとしちゃった。

残念ながら俺たちイカには、

オスメスの交尾も子育てもない。

ムラだの、ムレだの、カゾクだの、

そんなものはまるで分かん」

クジラ撃ち、これ見よがしにクジラ肉を頬張りながら、

クジラ撃ち 「クジラは、うまい。うまいなあ。

そして、クジラを殺すのは楽しいなあ」

補足説明の人、入ってくる。

補足 「すみません。実際のクジラ撃ちさんというのは、

とても素晴らしい方々ですよ。

今これは演劇なので、オシバイなので、こんなヘンな感じになっています。

実際は違いますからね」

やがて、捕鯨の旅が終わり、横須賀港に到着する。

人間 「横須賀港に着いたぞー。捕鯨の旅ももう終わり。

もう乗ってくるなよ、シヤチ」

サブロウ 「俺はシヤチじゃねえ、サブロウだ。また会おうぜ、人間」

人間 「俺は人間じゃねえ。俺の名前は…おっと、危ない危ない。

うっかり名乗っちゃまうとこだった。名前がバレたら探されちまう」

サブロウ 「名前なんかわからなくても、絶対すぐまた見つけてやるさ」

人間 「へっ。おっ、あそこにいるのは俺の家族じゃねえか。おーい。おーい」

人間、迎えに来ていた家族と再会する。ナンゴウ、一人で船を降りてきた。

マッコウ 「お前の家族はどこにいる？」

ナンゴウ 「ここには来ていない。遠いからな」

マッコウ 「ナンゴウムラってのは遠いのか？」

ナンゴウ 「電車とバスを乗りついで、まるまる二日はかかるだろう」

マッコウ 「行ってもいいか、お前の村に？」

ナンゴウ 「なにもないぞ。山ばかり」

マッコウ 「それでも行きたいお前の村に。」

僕のごどもが、お前の村に行くのが見たい」

青森県南郷村へと辿り着いた一同。

ナンゴウの親戚たちが、その帰りを喜ぶ。

父 「よく帰った。よく帰った。疲れたべ。まんず、ねまれ、ねまれ（座れ）。

父 父っちゃんも、母っちゃんも、なあんも無事だ。

これは土産か？ クジラの肉か？ ありがたいなあ。

昔は、ここらは何も穫れなくて、アワ、ヒエ、麦の皮も食べたもんだ。

おめえがクジラさ行ぐがら、銭っこはもらえるし、こつたら肉も喰えるんだ」

ナンゴウ、瓶に入ったクジラの胎児を渡す。

父 「あらあ？ こりや、なんだ？ クジラのこっこ（子）が？

ああ、そうが。船で見つけて、殺せながったんだなあ。

そんだよなあ。おめえも、わらし（子）いるんだもんなあ。

クジラのこっこだって、殺せば、気分が悪いべなあ」

ナンゴウの妻と子供たちがやってくる。妻は身重である。

母 「そら、ぼんずだ。抱いてみる。

（子供に）ほら、おめえの親父だ。会いたかったよなあ。会いたくて会いたくて、

アルバムさ載ってら親父の写真、毎日見でらったものなあ。

帰ってきたんでえ。長え間どこさ行つてらんだが。ワアも知らなねえ、

遠ぐさ行つて、稼いできたんでえ」

父「さあ、このクジラ、食うべし」
親戚「食うべし。食うべし」

語り出すナンゴウ。

ナンゴウ「昭和12年。

南郷村から初めてクジラとりに行ったのは7人だったそうです。それから行く人が増えて、増えて、増えて、昭和35年には200人以上になったそうです。私が行ったのも、たしか、その頃だったかなあ」

ナンゴウの回想。親戚から捕鯨船への出稼ぎを勧められる。

母「おめえも、クジラとりさ行ったらどんだ？ 兄貴ふたりも行ったべし」
クジラとりさ行けば、銭っこもらえる。楽できる。

クジラとりさ行ぐなら、嫁っこも、もらえるんだ」

ナンゴウ「嫁？ 嫁？」

母「かかあとわらし持ちは、会社が、別に手当ば出すんだと」

ほら、またいここに、おめえと同じ年の、めらし（娘）がいだべな」

ナンゴウ「ああ…」

母「船さ乗る前に、戸籍だけでも入れておぐんだ」

ナンゴウ「それから、すぐ結婚して、

すぐ船に乗って、帰ってきたと思ったら、また船に乗って。

11月から4月まで。船の中で働きました。

8時間働いて、8時間やすんで、また8時間働いて。

昼も夜もなかったです。金はもらえました。たくさんもらえました。

一回か、二回、船に乗れば、家が建ちました」

ナンゴウの妻。

妻「やせた？」

ナンゴウ「やせた。お前は、太った？」

妻「太った」

二人、笑い合う。

妻「どうするの、それ？」（クジラの胎児）

ナンゴウ「どうしよう。学校においてもらおうかな…」

二人、去っていく。

【17】

魔法がとけ、海の中に戻ったマッコウとサブロウ。

サブロウ「マッコウクジラ」

マッコウ「お前はシャチ」

サブロウ「そうだ、俺はシャチ。お前はクジラ」

マッコウ「なにもかもを見届けて、元の姿に元通り」

シャチ「人間の世界ともお別れか」

マッコウクジラの家族たち、近くを通り過ぎる。

マッコウ「僕のメスたち、こどもたち」

サブロウ「あれがお前のメスか。こどもか」

マッコウ「僕もそろそろ帰るとしよう。僕の群れ、僕の村

メスー。こどもー」

マッコウクジラの群れと合流しようとするマッコウ。

サブロウがその進路を阻む。

サブロウ「マッコウ。よく聞いてくれ。

お前は俺の友達だ。

船で同じ時間を過ごした、いわゆる『朋輩』ってやつだ。

だから、特別に、教えてやる。いいか、よく聞いてくれ。

今から俺は、お前の家族を、一頭残らず喰い殺す。

海の魔女との約束だ。共に過ごした友達の、命より大切な家族たち。

情けもかけずに殺せるのなら、また人間にしてやる、と。

海の魔女は考えた。俺たちふたりが人間となり、船で暮らせば情がわく。

お前はクジラで、俺はシャチ。それぞれの生き方がブレちまう。

海の魔女は、だから命じた。

お前はクジラで、俺はシャチ。それぞれの生き方がブレないように、

いいか、もう一度、よく聞いてくれ。

今から俺は、お前の家族を、一頭残らず喰い殺す。

腹なんざあ、滅っちゃいない。ただ、ただ、殺すんだ。

食物連鎖の最高峰。海の殺し屋と呼ばれる俺の、これが本当の正体だ。

やめてほしい？そりゃ無理だ。海の魔女との約束破れば俺は海の泡となる。

そうはさせない？どうやって。忘れたのかよ、マッコウクジラ。

お前はもう、超音波は使えない。家族に危険を伝えられない。

追い掛ける？やってみる。お前らクジラが泳ぐのはせいぜい時速30キロ。

俺たちシャチはその三倍、追いつけるわけがない」

マッコウ「……」

サブロウ「あばよ、マッコウ。楽しかったぜ。

楽しかったが、もう忘れよう。

お前はクジラで、俺はシャチ。

それぞれの生き方、死に方、殺し方。殺され方ってもんがある」

サブロウ、ものすごいスピードで泳ぎだす。

マッコウ、必死に後から追う。しかし追いつけない。

マッコウ「マッコウクジラのおでこには、

脳油という油がぎっしり詰まっている。

この重さをコントロールすること

で海底三千メートルまで潜ることができる」

マッコウ、サブロウを追いかける。追いつけない。

マッコウ「マッコウクジラの筋肉は、

ミオグロビンというタンパク質を持つ。

そこに酸素を溜め込むことで、

90分以上は無呼吸で泳げる」

マッコウはサブロウに追いつけない。

マッコウ「マッコウクジラの歯は大きい。

重さ1キロ、長さ20センチ、

それが下あごに30本。

歯をもつ動物の中では世界最大」

すでにマッコウの視界に、サブロウの姿は消えかけている

マッコウ「でも…それがどうした。

今、それになんの意味がある。

逃げ。逃げ。逃げ…

メス…こども…メス…こども…」

必死に泳ぎ続けるマッコウ。

力尽き、気絶してしまう。

【18】

海底で倒れているマッコウ。

メスたち、こどもたちがやってくる。

「びびび…びびび…」

メスたち「おかえりなさい」

マッコウ「あれ？」

メスたち「あれ？」

マッコウ「シャチは？」

メスたち「シャチなんて来てないよ」

マッコウ「あれ？」

メスたち「イカは？」

マッコウ「イカ？」

メスたち「イカを捕まえてくるって言ってたじゃない」

マッコウ「…人間になって何日も過ごしたのに、こっちでは、

ほんのちよつとの時間だったんだ…」

メスたち、一匹の子どもを連れてくる。

しよんぼりしているこども。

メスたち「ねえ、この子、おっぱい飲みながらじゃないと深く潜らないのよ。

あなたから、潜り方を教えてあげてよ」

マッコウ「ああ、わかった。父さんと一緒に潜ろう。

怖くないよ。父さんも最初はそうだった。

さあ、行くぞ。せーの………」

マッコウ、こどもに海底への潜り方を教える。

それを遠くから眺めるサブロウ。

【19】

海の魔女とサブロウ。

海の魔女 「どうして殺さなかったのだ。

この魔女との約束を、破れば海の泡となる。
どうして、そんな愚かなことを」

サブロウ 「もともとはシャチとマッコウクジラ。喰う喰われるの捕食関係。
それでも、あの船の上。共に過ごした数日間。

俺たちは、ひよっとしたら、家族になった」

魔女 「シャチとクジラが家族だと？」

サブロウ 「あいつの家族は、俺の家族。殺せるわけがないだろう」

魔女 「クジラを殺せぬシャチなどと、

愚かも愚か。まことの狂気」

サブロウ 「偶然たった一度だけ、見た人間に憧れた、
馬鹿で身の程知らずのシャチだ。海の泡にでも、何にでもしてくれ」

魔女 「クジラを殺せぬシャチなどと、
海で生きる価値はない」

魔女、サブロウに魔法をかけ始める。
覚悟を決めるサブロウ。

魔女 「ならば…陸で暮らすがい」

魔女 「サブロウ。人間となるがいい。

かねてからの望み通り、海の魔女の力によって、
お前をとこしえに、人間としてやろう。

海の者と人間が、共に暮らせる世をつくるのだ」

【20】

サブロウは人間の姿となり、陸にいた。
自らの手足を不思議そうに触るサブロウ。

そこにやってくる人間。

人間 「うわあ。シャチ。お前、また来たのか」
サブロウ 「俺はシャチじゃねえ。サブロウだ」

サブロウ、遥かに広がる水平線を眺める。

(了)

※上演を希望する際は、有料・無料に関わらず、必ず戯曲使用の許諾をお受けください。

「海がない村の、くじらの物語」

劇団「柿喰う客」主宰の中屋敷法仁（十和田市出身）を演出・脚本に迎え、八戸市内外の出演者とともに創り上げた、かつて捕鯨漁従事者が多く「くじらの村」と呼ばれていた地域の歴史をテーマとした新作演劇作品。

山に囲まれながら、かつて「くじらの村」と呼ばれた南郷。米があまり獲れない地域だったことから、村では昭和12年（1937年）から捕鯨漁への出稼ぎを推奨し、多くの若者が南氷洋での捕鯨漁に従事した。

作品をつくるにあたり、実際に捕鯨漁に従事していた方からお話を伺ったが、船上での仕事や生活は楽なものではなかったように思う。しかし、また乗りたいかとの問いに「もう一度乗りたい」と力強く答えていたのが印象的だった。広い世界に繰り出せる期待感なのか、「3航海で家が建つ」といわれた羽振りのよさなのか。人々を惹きつけた理由は様々だが、捕鯨漁には実際に乗った者だけに分かる魅力があるのだろう。

演じたのは10代〜70代までの一般公募で集まった14名である。演劇経験はないけれど、家族が捕鯨漁に行っていたことから興味を持ち、参加を決めたという方もいた。ワークシヨップを重ねた出演者たちは、クジラに、人間に、時には捕鯨船にと、身体一つで多彩な表現を繰り出した。

主人公のオスクジラは、捕鯨船に捕まった妻（身重のメスクジラ）を探すため、海の魔女に人間にしてもらい船に乗り込む。願いもむなく、メスクジラは助からなかったが、南郷村出身の若者が不憫に思い、お腹にいた赤ちゃんクジラの亡骸を故郷に持ち帰る。彼を追って村を訪れたオスクジラは、乗組員やその家族との交流を通じ、たくましく生きる人間の暮らしに触れ、自分も家族の待つ海へと帰っていく。

劇中に登場したクジラの胎児のホルマリン漬けは、現在も南郷の「山の楽校」に展示されている。クジラの目線から描かれつつも、南郷に残る「くじらの村」のエピソードが随所にちりばめられた作品は、ファンタジーと現実が交じり合った「くじらむら」を私たちに見せてくれた。

公演後、青森県野辺地町に住む観客の方が、有志で捕鯨の記録を残すためのDVD制作を始めたと連絡をくれた。企画が南郷だけにとどまらず、他の地域へも広がったことはうれしい出来事であった。

この企画を通じて触れた、捕鯨漁に携わっていた方々の記憶や思い。家族を大切にし、遠い海の上で懸命に働いた若者たちのことを、私たちは忘れてはならない。

はちのへアートアーカイブ
「南郷アートプロジェクト」より抜粋